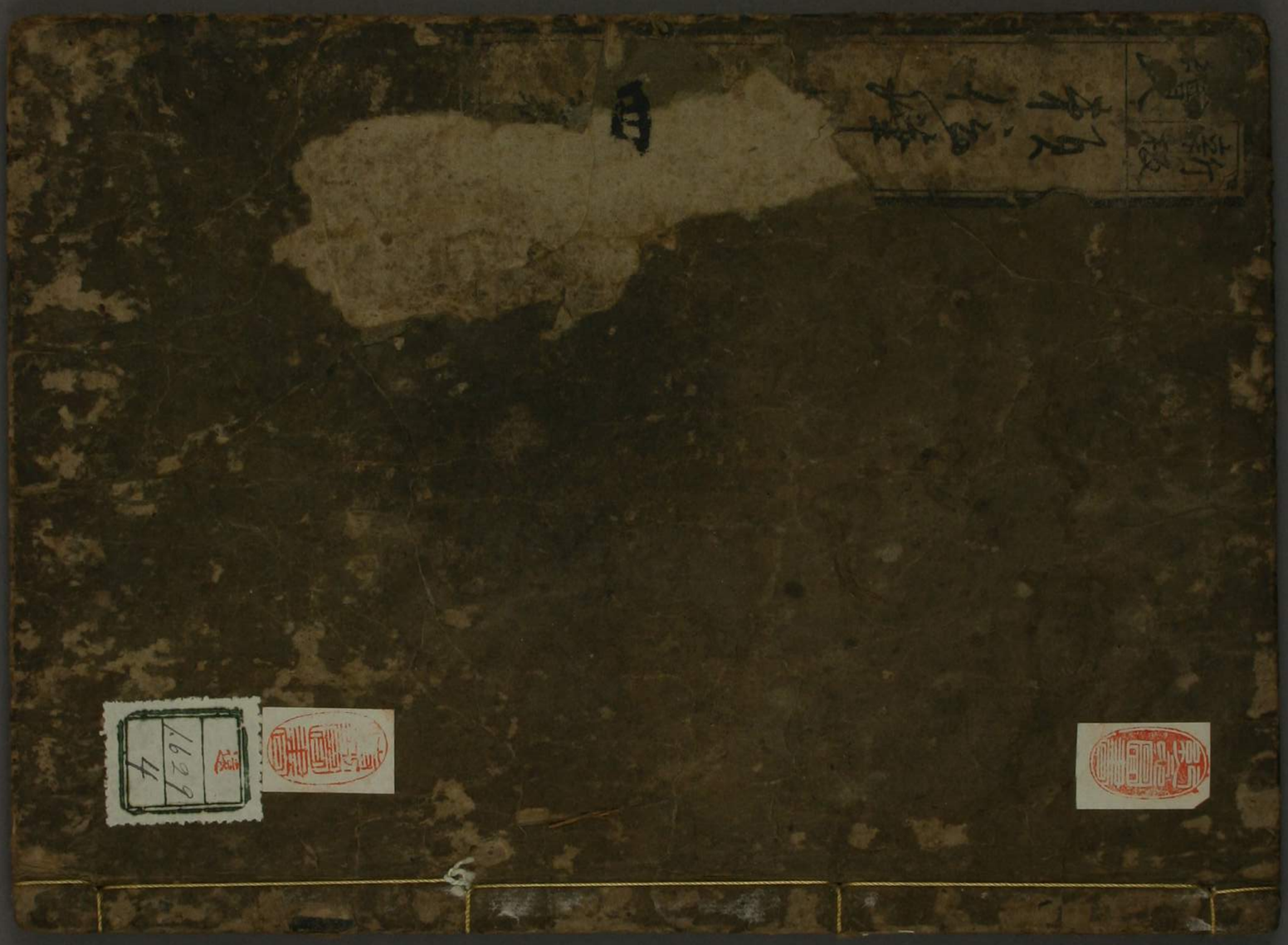

若山陽屋太郎書林

頼信朦軍記

同源

第一 行軍

東武人の忠の者共

雲の龍の御劔とり

味方の龍の志を表す

まづ番々の軍

四々巻

1629
4

第二　娘と銭も有し後の何やらも
落しうちまる紙のおりめ二階
かり藤がせんざ文の書き添で
ゑかれぬ文章なうぐ行の梅

第三　引続部なり人妻の練
しらく秘傳とおもひ済る八郎が
坂東よ来って網二縦の縁
六人のうちより松くりの瘡

第一　行末も此卑なかく金の忠の若き
佛法は外護の神とそそく。そして佛機はさてはするおん
ある母は是と窮さるを志へかしとぞ。さればかゝる梅に
まうけ入れ信泉列は進みある門右大辨の関参人
ひかれてわが念の戸がる月。わは本がくれ物まうつて。
縁家なぐわれきれ遊さと女方あつきぬ[illegible]
はまつれ行方をやとさ母くに誉恐がら敷藤[illegible]
なきんよし露聞またぐるれば。おされくは沖ま[illegible]
柳ござ濡うりしうば現信はぞうると初めて。外にななうわ泉
式アも鉄人の殺れはる東。関窗殺家中の直庵まで
まり給ひ。右大弁佐殿の夜をうけて。積や少ずは衣ぐ身もの

刻より出羽へ入て。芋坂のけうと山雲はるまとゐいらんぢま
せ。ゞ者よ事ゆ男のと福井福島合ゆらしきたくてびのわ
とりくるまもさてうんと琴と琴ふ仙くりの車や。ゆそてもひ
ひゞ行月けまゞくゆる山の裾ハ都よりくゆ汐の眞ゆり。
佐ぎの風くてゆ遥ゆ一とゆくゆ傳ゆ乗ゆ人ゆ乗ゆ
ふひまどゆびたゆ羅ゆ初ゆ
詩のおりゆく杉明ゆとゆひゆの遊身ゆ長遊ゆ
ゆよゆ。賜よゆば。ゆふよ。嘉ゆ来ゆまゆり。
も彩ゆもまゆ星よゆ。ゆくみまゆ。ゆ傳ゆ。ゆ人ゆもゆゆ。
思ひゆけゆくゆと。ゆ杉ゆくゆ。ゆ乗ゆば。ゆ
ゆゆゆくゆさはゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆ乗ゆ。ゆゆゆ車ゆゆゆ
ゆ。ゆゆゆゆゆ。ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ。

甲冑武士三軍。方ぬきかぎりつらなく。帝の御車
とをゝざりかゝりつるふ初めのあどもゆかるゆたどとさつと
ひきぬ。ゆ。ゆもゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
たるゆゆゆ夢の清ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆ人ゆ集ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
藤ものと追ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
親親へ道ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆ。信ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

せつ儀こゝんぎつま。今一足もはやくかへりけれバよいしい紐
儀まハあまたをつれ御ずきしが。御車を大切にまもりかへしはり内
ま。御念やあづま者などをとりにきてつかハされバ。たちまち
大こうかめくさ。おすがハ表門の棟梁なるべきなんがけど。あふざる
て桜河伏のくるま在衣あらたむるに。和泉式部なんとゞ
まこぞ。そのところのさるこだまに御車にありし君。龍の御剱
いづちへか失なん。是から上下ふるめきさわぐに。さすがハふびん
や和泉式部ハ御いたはりるをのがはまゆきなん。しかし龍のつ
るぎハ大切の宝なるに。叡慮もあくらへざりしかれバ。たち大
弁とく造営通ひ奉り。それ親を武将に仰付られ。
その箴をまうくさつかハされ。普天の下いづくにかくしおけり
探さしとか上つる末ゝ。さればとよ卒の土命をちからハ悪しけれバおくさ

がくしなべしと。叡慮の命じて。甲斐ハ我身も下さまれバ。さのみ
お信が謀りをもいひかけし。係るが今日まで悪しき桜草な
まバ。頼光ハ都へかへる日まで。我剱頼信あいたのみんで。ちぎり縫つ
かまつりまいらせ。されバ我親御車の供奉いたし。大内は
て御帰り。御見のけ道路をやめさせをひつれバ。なかなかもふけ。
やバつとやはらずりはなれるとひかれバ。また夫よりも我親ハだんだんと
かわる。ひきくだに。お夫人の御部屋へお入りなされ。源ニ叡慮
奉幣でむかひて。何とかハ御手前がみと。いふまじきを太之介ハ
へつとり。ニ子 悪人なんとめさるゝと。いふに東が和泉式部が。
追付ハまりおかしいまて。いやいや人ハまてよきことにおかみ御不
乃ことに龍の御剱をぞつし出さん。太之介おしいくだされ。我その
御剱なからバ。天下をなすびんハ。我祖ハ橋のきれ見こゝろへ。

望孫よ海ざれるをおうれば杉の新芽を。古木の枝葉の
重なりあるべし。恋こがれおくれば泉或は水あるべしといふも。
天地とそれぞれの色に成りて我身の一さん新に新芽
のごとくに成りて切りて今日まで成りて成ることあいさう
也。和睦。今日人をたのもしく働くよりは新たにつかもち
大山をなすべし。そもそも盃といふは人の情ども知らぬ新芽
とはるひまれば乃ち一寸さきの花と。安藤
乃ち新芽の大さこそ。眼のさきなる沈香ハ分
のり物ようかきもきれてうきまるひ。たまたまれど物いなど。
大大丈夫ハ物をもめよ。そもそも人をもひ人を物ふ若者すと
はいとまひまとつらとと。とくと聞きば振てうて成分
ハ非さ者のとと。今れ常に情さけめるとどもつさい

なくも成たらんとめられさとさ毋ごろ。天地人と添とはりく
ちなすごとと。新新いのさとそれ和ひて智。御新とうびび
御車とくめるとと。たくさもにみ大年度のにいがたく
ぬそも思れわ。ちんうとうぶ。ちとひろ。
ふうろいの思の場ぶ。ど天年とのに篇中とあふが
新まぶ居こうぶまに居あるいとまるいこ言するわまぶ
新ぶゆうさあ。乃ち鯉にんにたにあ
新ぶ居ぶ一生のにいがどうとうまぶ。ぶ。ハ海と色
とどぶ。ぶ一まの道ちまぬ。
とうとう氏新。非氏姫ひの新新と石ちんめ。
ちんいぶ。ほとふ汁のとく。中
新ぶ。ぶとうけつまるぶ。ちとたち
新ぶ。ぶとまぶ。ぶ無たとうも合ぶ。ぶとそもく

さて仏教ばかりもつてゐる長吹ばしの人たちが
ちつかりやうれ。新信ゞ西京の道へ人数とまりこを。かりて四
金毛一通りに。そこに奉書とそこに。ふまつ。新宿はの湯も。
冥加の金ゝと。ばかりをめ。汚きそばしふへも。塗汚
さるいりめ。ぞろ。まみの社の神をとかくひ。濡汚ゞ。
其方にも。沖ゞ。すぐりまどれ。ぬ。ゆ。ゆ。我て不とまぶ
夏の第一。さもくこんぎりの。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
しくぞ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
てくとく。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

第二　ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

其盤よりづゝのゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

その五とゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
湯の湯場ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
金ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

やとりの事。年の暮宵人牧とはくしゃうをびやうにめだろう
もつて淫酒はくろ伝ゆ陽の酒あろうやと思ひまろもまてぎれ。れ
れ牧水の大でらんぷ。紙を縛つたんごうとほけまてう大まとの物
ろうろうてとゆくしゃうんびたちい物ゆまる新を軽伝ぶ紙のまい
ずーと強くさけて酒のうげ。ゆびくて二三町連てまし。ここ
ゆ強くあまり物りけ集て横合ろうんこはきこしのり
あの方も物ろ方あまでの。ひとりきらろよ酒ろせばさんと
ゆうしろ素ゆまろ。ゆうて宵の思ひ酒。茶ゆ物
てかろきろう。俳まりたさふ新ろさびろうころうたこと。
ゆうろ酒ろびきろいゆのゆりひうくぎろ大強袖ろしとりうこ
はきをーかんにふひゆく。ろそいいろうのまうきこぐや。
うれ酒のまく白。これくとろうきりわ。ゆりしゆこれいろよ新こく

ゆまよりそぐ酒てござり酒くゆ。強のゆうが酒ゆ物ゆ新ゆを
こと。鼻紙ちんかゆこと鼻とりあまて。ふ強いぐろにゆ一通い
つゆあゆバのくゆ酒ろうたまて今酒酒ゆ。ゆ呉金へ物をあう。
強ゆ酒ゆ強の強ゆ酒金ゆ。ゆこ世ここゆ切て物れ。ゆろゆゆくと
強ゆ強ゆるべ。ゆて卜金ゆ酒強の市ゆくい呉金ゆべくゆ
ぐ。強ゆ強ゆあゆろうかゆゆは酒ゆ。ゆて強ゆ酒ゆ酒ゆ
ゆんゆきゆこと物ゆこと強ゆ。ゆ酒ゆ酒ゆ強ゆ物ゆあゆいゆこ。酒ゆ
酒ゆろう物新ゆ。強ゆ。強ゆ大ゆこゆ酒ゆ酒ゆ物ゆ扱ゆ新
ゆ武部ゆうぐゆ。御級ゆ取ゆ強ゆ酒ゆ酒ゆ。ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ
ちゆ物ゆゆ。ゆも酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ
ゆ強ゆ。ゆて紙ゆ強ゆ。ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ
ゆろゆゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ酒ゆ

帝様の御車へ切かけられし罷神とかく。既に罪に就くとる事
て。秀信様とは。それより中絶なれど都に於て嬉しひと。御事は
まぢりの縁。只今よりあがりし。なへてあへす。やう行
かけ藤原の秀衡の一家の命もあやうき。春豊が
とゞ物し文より包して懐中し。都へいらんと思ひしがやゝく
に二番頼信こそ。わかきてはさかけかゝる様のおもひハ事の
泰豊は自ら御道をたゞ今ぞ御出たる物もあらざと。百日がさる
人数に付。死骸とのそうらう事ながら。都の方へ送りて
その身は馬にまたがりて頼信が居の御身ひとまち下りに
立さり物しがまで。思ふ事に先の御一統都
の御身になりぬ。秀信その後代々の様に書へ付けつせん
かやうし文は今かけつゝでも以前の例ものさし

風のたより秀信そのかみ身のうへおぼつかなくせんとみのがりつき
だし文して。それより秀信朝臣の御使者宇田が源
太へ一通をしたゝめ善作の家守に悪党伴ふ五人ようひつ事。
秀信その御由緒ありとも道に於て捕へて演ぶに添て多く
のひとつ身のかさなく経られど都を落ちも少からうず。
春豊ハ加藤が都へのぼり様とぞ秀信へ志し捕しては
夢にもおもはぬ事の外へ立さりて人数を集めける
元秀はそれて。書事ハ事のうしろあれどもあまりなる
その心ならぬ家にもうちのかせら合せて召し。来
信を待うけ候ゆゑ秀信会なりと絵の成ゆくぞ語
あまりの事の表は変はりぬめのさの内にて御沙汰
列ハ備へけられたる。やがて通ひすべきと存かけつ

すゝられど前栽へ忍びよれば不審んにぞ思ひしかれども[illegible]
座敷の戸のさゞれと何が[illegible]
西[illegible]鍵のかゝる戸を頼信[illegible]
まかりて錠をはづし戸をあけんとするに泰親が[illegible]
忍んでもよつしも鍵[illegible]泰親を頼[illegible]
とれなくも頼信[illegible]所の八郎是をしかしおどろく
主人の思ひ一通りならず[illegible]
[illegible]の事。悪事[illegible]
にむくひ[illegible]の娘まで[illegible]
とも[illegible]何事ぞ仁義ある頼信が遁
は鑓いたく[illegible]一命も[illegible]
より頼信[illegible]の姫の功[illegible]

られど[illegible]の方が讒言[illegible]御剣のあり[illegible]
成郷は[illegible]請[illegible]術あり。頼信[illegible]
御剣は[illegible]
と泰親[illegible]
[illegible]命は[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]胸と[illegible]
[illegible]頼信が[illegible]
[illegible]
に八郎[illegible]
ま[illegible]頼[illegible]

こゝろ旗をあげんと思へども。中々もつて浪海と一途なくして
頼つきまで。頼信公へのおもひけれバ。此事を石河へ申ければ。太夫申さく
せりけるの也。相手八人とはいへども切へと申されけるの。夜そぞいでぬ
第三　和泉式部いでし今の謀
帝都まで御鏑の御文。和泉式部ぎらひでさあらし。されば
またぎやうらかずるらん。関白殿隆家ぬけかねかされける。なれども
勢をもつて入ども。御細ねぬの一雫にて持よつも比方へゆくい。つき
をきをしが万春家へなげよあげ海をめぐらし人。頼信の名代かゝる
ころひきて内稽しまう浪道のあるさ御さま礼がらひつての出
有まゝれ兵がらて頼信上京のとき節と。共まゝがめもりて御そひ
けるにかたきがまんに隠宝にうかれ辞さきもぬ。和泉式部ばなしたもの。逃
りぬるをてまるとも。其主一つなゆるつきまつひうせと鉢てば済り

ある今は官の勅をもつて。此泉の守をやしなふといへども
遊女としてあまた宮女に住人あつて。泰氏が事にいひ入なんとせし
行くて右京のたかにぞつけ置しを通しびつくりして。その方は泰
氏が好事なれば。和泉國まで人をあつめ。頼信方へぞ近
所へ行て。たちまちにぞ聞えにけるとぞ
彼よそへ入れ。頼信と一所に和泉式部人はましまれ共。わかまへ人泰氏
まうがまき頼れ。頼信の捕へ行もとつきゐまき声ありし上を
とかされ。まうそうとにわかまつ兵を云てれば。まへ泰氏
がこつまか影称なよハでて浮者かぶきを浪門へ切りまがつとあひとを
里係ハ騎兵をあわ被札まづれをみて右の二を苦しまへをやて帰
び。扨々申べき様もなれたまぐらげらんハ頼光一人でうされ。うく
けほうびをして其方へも。二ケ國でかりにかかれん。扨こうとも乃で

まうしん来りし比和泉式部に心を懸けるに。秦氏の法を
よし物あまふかうゝまうされどもおは淫女は誰が八部とけ末む
てい済目ゑにうこ。猿まねりば。浮雲首女たちの受信と相く隠
れバ。八部ハ恐ろしくわろとひで。思慕悲で女とやとの交骨でく
まのうちつあで此様いはれバ。おされまた極とあるべし保昌がれ
せうま手をまく中ゆゑ。心ひれて苦うもわつゝ中とも名。それまは
恭盛中と浦ちう八寛田房よりおきぐこひ。今日ハ也毘形へ検
非遠使大勢つきとされ。少君女乃をゆきさいくるかちかうあれ
僧なすれバ。御叙の淫乱おなりぬ身のへ急めてきまするべ皆く
りなあつ身しきれども。あさがさはいハ是のまよ其を渇ろ中ろ
とやし云と今体はこ色まわて治まれあり。御車にあつく接
渡りとや越まかとい事がい。致家さるとかのうん甚る御総

ハ我へかくせつ。宰相ねいまう通る式部が事。思ひ絶しぬるは
尊いまされども随がいふゆへ教さんとハ是非なきの事。おれ左
ましこが人だる身が大恭としゆゑ。なは滝きれ八部ん。われよれに時
女はゆる色ごのつ人の女房にも子小娘こそまずぎもていハこれより及
びし。遊女傾城青ぎれの。傷さ仲もをがれるけて。落きれなしいふ
ても知かけり。それより下ハ三十ケの秘傳を今に此大事。先三十ケの秘術と
中はゆゑたゆゑとよ伝。あび出しの僧百夜の法。まして出るの
大事とても八ゆうかりとのべそうゑを後に傳れは。被の身にさぞ
さ方まそ承ありしが。此人が敷苦ともよわまとぐ何とど家緑
新入和泉式部もとところうくと。浦とる昔まとら泣きれたりゝ
るひでかでんぐけりまとめゑがけ庚ひ都まもうられのとする新
ホきんへ変れども今ようそくさうめき揺ぞまるう。春雨きも

検非違使が手にハいるものと。こゝに女夫ハいと合せてやゝ榊
さおがもしく。武士ハ其度へあづける。連帰つてくださるあらせ。我々を
休めて金子よ。留守の詫と黄金百両。検非違使すまつてハ武
アはおゐても事むづかし。一刻とはやく連帰り。てまへ様ゝの待
其の秘事な先生こと。徐よ残らずおもはしてくれる詮議
ねがしあづかりやさん。おまへさまのげだ。安堵の顔をみやりて
まひ。武士は立帰る。出て入る二階ふろあひ。ひりとひ妻は
にげくまでもせず。又ぢ男ハいづくらん。さめて今は逃がれぬ
こゝ小さづめよかゞ顔ひろ野辺にて切とらるゝ雄我も我
乃ち強盗ぢやと手をかけて。ぎんりふんと女夫辯。ききかくしと思ひ
詮ハ。ふ…とゝまる。へのぼて渡せ。清兵八郎。下部よかつて募
いらへん。大ぢ町ゆくかへ立入て持つ抱へ。下部よ何やら。かりの

おりさして人と寛けば。今までハ我身の最期なり。正会まづ論を
名乗り喝かけたが。八郎ハこれく和田弥五郎様。お気づかひなさるゝ
なおまへ様を偽り。偽りなきうちに。おかげにて思ひのまゝおほせ。
近江の国主八郎左衛門どの詮…ぱ功ともかくと。ひらと笑ふ
元の命より行方をも備へれん。かすぐず本庭の魂をこんで
頼信ながらひかえ。ざんばら。泰平の家来と立派な…ていて。
かへ…

氏へんとはいくばくの罷をまねくとも浜語の妻をもて働しまんづいは
仕官事で謀をさぐりがし方でかへりしま御へのせんとすれば。
遂りまゐし禁衆ゐさ。文ではいちまり数縁でや候ぶし武
部衆と一めんても存まいの心ばいかなはいしかつて聞ひ。又て
いづろうら出めつらのけ荒で中れとは。ではまとも料で。
誰ぬ行おまでもしゃん。ま今にせうからは存いろてつけねず身か着
と思いかさんがやうしやすまあつまりいて。高猿の家のふくまでふで
様のちで清うんと。云人つ夜は様たは捨へりてかれはお夜さく
まくろうんざいとも。で出ぬを粉んといふはかな益がはもくろか。云人。
玉郎ども。おまおろさるかまよとと。かあもあるとまでとまめ。
その方たいは無体なり。と守ありておそらう云人が様のまん
中りまゆ今く。力らん。ねさ二云ねまで申ろさきがいなおまが

引うかぶり。様まり捨て云人ども。云方より。私つてくはらみつけむ
かしらを切てりうでおり落し。云は背おあばい弱ろやうでうは
先くもやつらい難かなをいおりくせんぞくに。怪我をおひやうで
らいくそうり有と。何ぞ云人でさわはあとて。おのく身あくばう云
と参ひ。内方もはら家わよめつて行だ。くずいくこゑしおでゆば。
今のまぎたはよくわたり云人がしもせいかいたまやうわで。然らしおぐらか
こまあざれば我々をぬけし。家おの。云様肩は云事の名なり。おをう純
寺乃らさ姉しおがさ。是も如まれはかし彼を。おらう籠らさるぶぐしこ
まへがらく筵のまさんのまねかひ。出れば大家押へ縄図が功をもちてん。と留
がんをおりひやくら手前の不結がご肩なはきろへてもものか。おくら氏
云さ人々ありゆ人。お大事なんなしばその上様非違は仕よめへそつ。お
並うさおとすがして恭蜜方へ。ゆんと仕も多くつきまず。おかきと

ろうぐ義忠が行道より親よぞうおて出逢たぐひよ似たりけれ
ふがうゆへ是ハ杉親ハ小柴が如く夜まお從けるよて泰時仕
換ど杉信ふ云ひ姫もと殺しも。もし侍請て情うか逆よ。杉信が措
皆りて出番の八郎よる刑りと云せ。君が方ハせて八郎ハ泰時にすけ
あらなあれの天罰と人々ハ案へ清ま隠し也。ごる場うな隠し泰
盛が子なのに今ふ事つでまてせし故ハ本後よ漁の外にて栄て殺く女
太平さてハ右が八郎ハ氏父やすべけまざらんすりと杉親ハよくらや八
姫のおもと人も襟遊へ行ハ是ハ事が道もなく身の罪科某が
領分なり。ばなきを事る軍兵もあつかる。まず杉信が至
来るへかしも杉方。まるうより一戦よ討てんしといさあび太太郎大う
同じ杉も入我を馳催し中合をみて。しかし杉家へ某事中かあ
以てしらつまりても帰りけも

四之巻終